

## 【ジャワ島中部地震災害緊急医療救援報告】

### 国際医療救援部 中出雅治

ジャワ島中部にある観光都市で知られるジョグジャカルタをマグニチュード 6.3 の地震が襲ったのは 2006 年 5 月 27 日現地時間午前 5 時 54 分でした。

スマトラ沖の津波とムラピ火山爆発に続いてインドネシアで立て続けに起こった大災害に対し、各国赤十字社はただちに反応、日赤もちょうどスマトラ復興事業で現地にいる駐在員 2 名に加えて、翌 28 日に医師 1 名、看護師 2 名の先遣隊を送り、アセスメントを行いました。本院国際医療救援部は地震発災当日から本社国際部と連絡を取り合って体制を整えていましたが、先遣隊の調査の結果、医療ニーズありとの回答を受け 5 月 30 日に医療初動班が組まれることになり、医師の一人に私が指名され、6 月 1 日夜に現地入りしました。

今回の日赤医療チームは、看護師が姫路赤十字病院の高原看護師長、日赤医療センターの赤井看護師、熊本赤十字病院の安藤看護師、葛飾赤十字産院の石村助産師、医師は内科が和歌山医療センターの大津先生、外科が私、事務管理要員が本社の大屋さん、熊本赤十字病院の曾篠さんの計 8 名でした。

いつものごとく出発前まで現地の情報が錯綜していたのですが、行ってみると被害の状況は、スマトラやパキスタン北部地震のように数百キロにわたって広がる大規模なものではなく、阪神大震災型の局地的なものでした。ただし、農村部の家屋は壁がれんが造りで骨組みがほとんどない構造のため、被災地域はほぼ 100%の家屋が倒壊している状態でした。



家屋はがれきに



フィールドクリニック開設

一方ジョグジャカルタ市内には被害がほとんどなく、また道路や電気などのインフラもほぼ無傷で、都市部の病院も多くは機能していました。我々は、先遣隊が設定したジョグジャカルタ州南部のプンドゥン村という被害の大きかったところを支援することになり、ここに元々存在した 2 カ所の保健施設が機能しなくなっていたため、その施設に隣接してテントを張り、6 月 2 日からこの 2 カ所でフィールドクリニックを開設しました。被災者とのコミュニケーションは現地の英文科の大学生を中心に 6 人アルバイトで雇用しました。

来院する被災者は、当初は地震による外傷、時間が経つとこれに慢性疾患や風邪、皮膚疾患などが徐々に増え、また PTSD に代表される精神的な問題も浮上するとともに、がれきの整理や家屋の再建で怪我をする二次災害も増えてきました。また、下肢の外傷などで動けず、交通手段がないためにクリニックに来ることができない被災者のために 6 月 6 日から午後には巡回診療にあて、16 地区（人口約 1 万人）をカバーしました。

今回は連盟が大規模災害の時に通常まず派遣されるFACTと呼ばれる調査チームを派遣せず、現場でのマッピングも事実上行われず一時混乱があったものの、最終的に我々のカバーする地区ではスペイン赤十字とインドネシア赤十字が水の配給と医療廃棄物を含めたゴミ処理を担当してくれ、また我々のクリニックには地元のインドネシア人医師や看護師が来て働いてくれ、途中からは香港赤十字の看護師も加わった多国籍のクリニックになり、6×6メートルのテントの中は日本語、英語、広東語、インドネシア語、ジャワ語の5カ国語が交錯する変わった空間になりました。



フィールドホスピタルへ患者搬送 香港赤十字看護師と巡回診療

現地に約4週間の滞在で、のべ2300人あまりの被災者を治療しましたが、現地での地元医療機関の復興は早く、日赤も医療チームの追加派遣は行わず、我々のチームで撤収ということになり、心理的ケアを行うNGOとリハビリを担当するイギリスのNGOに、我々の診ていた人たちのうちでそれらが必要な被災者のリストを作って今後のケアをお願いすると共に、クリニックはテントと資機材をインドネシア赤十字と現地保健省に寄付した上で、現地スタッフに業務の引き継ぎを行って帰ってきました。

前述のように今回の被災地は局地的で狭い範囲で多くの団体が活動していたため、JICAや自衛隊など他の日本の団体との接触がありました。また報道機関もロイター、APなどの有名どころが我々のクリニックを取材に来ましたし、かわったところではジョグジャカルタを訪れていた福田前官房長官が大津先生と話をしました。

国際医療救援部では、今回のような緊急医療救援だけではなく、今後復興支援や開発協力などの案件も抱えており、多職種にわたる派遣予定があります。ホームページにはその都度活動報告を掲載していきますので、多くの方にご覧いただき、関心をもつていただくことを期待しております。